



美術館大学構想シンポジウム

神秘の樹と明日の鳥たち

— 詩・旅・思索 —

日時 = 2006年10月28日[土] 15時 ~ 17時

会場 = こども芸術教育研究センターこども劇場

パネリスト = 吉増剛造 (詩人)、赤坂憲雄 (民俗学者 / 本学大学院長 / 東北文化研究センター所長)

酒井忠康 (美術評論家 / 世田谷美術館館長 / 本学大学院教授)

作品提供 = 若月公平 (版画家 / 本学教授)

美術館大学構想シンポジウム

神秘の樹と明日の鳥たち ―詩・旅・思索―

赤坂憲雄 Norio Akasaka × 吉増剛造 Goro Yoshimizu × 酒井忠康 Tadatsugu Sakai

酒井 皆さん、「イランカラブテ」。

これ、どなたかご存じですか？アイヌ語で「こんにはは」の意味です。私はまるつきりアイヌ語はできませんが、最近、外国語、あるいは自国語という区分を意識しはじめまして。するとアイヌ語が私に近づいてきたのですね。急にこの言語について、親愛の情が湧き出て、最近、ちよつと勉強してみようかなという気になっています。萱野茂「※1」さんが亡くなったせいもあるかもしれませんが。

実は、私は民俗学に強い関心がありながら、北海道の生まれなので、津軽海峡というベルリンの壁のような歴史学的な障壁にぶつかり、柳田國男「※2」流に言う「民俗学研究の無資格者」と思っているから、今日はこの場に、本学の大学院長で民俗学者の赤坂憲雄さんと、ずいぶん昔から私がお付き合いしている詩人の吉増剛造さんをお迎えして、お二人から詩と民俗学の知のメソッドを織り交

ぜた、言葉の宇宙についていろいろお聞きしたいと、まあ、こういう趣向です。で、少々演出的ではありませんが、アイヌ語でご挨拶を申し上げるわけです。「イランカラブテ」。

東北／福生／封印切り

酒井 さて、本日のシンポジウムの演題は、『神秘の樹と明日の鳥たち』です。「樹」については、そもそも私がこの東北芸術工科大学と縁を持ったとき、とてもエネルギーに充ちた樹が一本ドンと、本館一階のフロアに置かれていたのが印象的でした。以来、このキャンパスの場を表すイメージとして、私の頭の中に定着したものです。それから「明日の鳥たち」というのは、柳田國男の、『傳説とその蒐集』という短いエッセーの、「傳説が植物なら昔話は小鳥に似て居る」という、次の一節からヒントをいただきました

した。

傳説を愛する心は自然を愛する心に等しい。春の野に行き藪に入つて木の芽や草の花の名を問ふ様な心地である。散つてゐる傳説を比べて見ようとする心持がその蒐集である。

傳説は古い國土の自然に生い茂つた樺や松や杉の様である。其處に成長し繁茂してゐる植物も、皆夫々枝振りが異なつてゐるから面白い。傳説研究は世態人情の微妙を窺はしめると同時に掬めどもつきない情趣がある。人はよく傳説と昔話を混同する。然し學問はこの二つを區別する。傳説が植物なら昔話は小鳥に似て居る。何處へでも「昔々ある所に――」と云ふ、同じい姿で飛び歩いてゐる。

よく私たちは、かつて偉人が座つた木の切り株などを、いわば伝説に近い、動かしがたい場所として指定しますね。柳田は植物をそういつた場のメタファーとして使っている。それから、昔話は小鳥に似ているとは、ある種の伝説を聞いた鳥たちが、それをついばんで、世界中を飛んで、あちらこちらに種を撒いていくということですね。

私は今日のこの集いは、ひよつとした

らそうした「伝説発生の場所」であるかもしれないと思っています。そしてお二人のお話の聞き手である私も含め、この場にいる皆さんは小鳥であるかもしれない。さあ、そのときに、場にまつわる言葉と伝達の技法を、日本有数の言葉の狩人・吉増剛造さんと赤坂憲雄さんに、私から多少揺さぶりを加えながら、ご教示

いただきたいと考えているわけです。それではまず、赤坂さんから。この場の池に、言葉の金魚を放つて欲しいと思います。よろしく願います。

赤坂 こんにちは。赤坂です。僕は今日、初めて吉増さんとお会いできること

に、とても興奮してやってきたのですが、と同時に、今回のシンポジウムの『神秘の樹と明日の鳥たち』というタイトルを聞かされた時からゾクゾクしていたのです。なぜかという、実は僕は、一五年前に山形にやって来て、東北をフィールドに仕事をはじめたとき、いくつかの封印をしているのです。まず、そのことからお話しします。

東京で仕事をしていた頃、僕は当たり前のように外国の思想家や学者の仕事を引用し、それに乗つかるような形で自分の様々な仕事を展開していましたが、東北にきたとき、それを一切捨てました。

ですからこの一五年間、僕はほとんど、外国人の名前を、自分の書くものの中に登場させていません。それは、柳田や折口信夫「※3」も同じようなことをやっていたはず。彼らは同時代の海外の思想家たちの仕事を、原書を取り寄せてみんな読んでいます。でも、ほとんど彼らの書いた著作の中に、その名前は出てこない。それは批判的にもなる部分でもあるのですが。

そして僕自身は、もう少し進めて、ほとんど海外の文献を読むこと自体、やめてしまったのです。東北にフィールドを定めて、どこまで自分は何を深く考え

※1 萱野茂（かやの・しげる）一九二六―二〇〇六年／アイヌ文化研究者

北海道沙流郡平取町二風谷生まれ。アイヌ文化、およびアイヌ語の保存・継承のために活動を続けた。二風谷アイヌ資料館（シシリムカニ風谷アイヌ資料館）を創設し、館長を務めた。政治活動面ではアイヌ語の日本にも大和民族以外の民族がいることを知って欲しい」という理由で、委員会において史上初のアイヌ語による質問を言ったことでも知られる。著書や絵本など多数。一九七五年池寛賞、一九八九年吉川英治文化賞、一九九三年北海道文化賞などを受賞。

※2 柳田國男（やなぎたくにお）一八七五―一九六二年／民俗学者・詩人

兵庫県神東郡田原村辻川生まれ。一九〇〇年に東京帝国大学を卒業後、農商務省に勤務し、農政視察や講演のため全国の農山村を旅し、各地に残る地方習俗や伝承などの調査を実施している。九州椎葉村の狩猟習俗を記録した「後狩詞記」や、東北遠野郡の習俗・口碑を記録した「遠野物語」等の著作は、民俗学の出発点の記念碑的著作として位置付けられている。日本各地の伝承記録の集大成に力を注ぎ日本民俗学を確立すると共に、「海南小記」、「民間伝承論」、「海上の道」など多くの著作を残した。その著作は定本柳田國男集に収められている。

※3 折口信夫（おりぐち・しのぶ）一八八七―一九五三年／民俗学者・

国文学者、歌人
大阪府西成郡木津村生まれ。折口学と呼ばれる民俗学を基盤とした国文学を展開し、日本民俗学の創成に貢献。民俗学にマレヒト（神、権威の概念）を持ち込んだ。歌人として釈迦空の筆名（法名）では古語を駆使し、日本語の美しさをあらわした。自身が女性になった夢を見たことをきっかけにして書かれた「死者の書」は折口学の集大成といわれる小説である。没後、業績は「折口信夫全集」全三十一巻・別巻一、「ノート篇」全十八巻・別巻二（中央公論新社）にまとめられた。



赤坂憲雄 Norio Akasaka

1953年東京都生まれ。東京大学文学部卒。民俗学者。現在、東北芸術工科大学大学院長・同東北文化研究センター所長。専門分野は民俗学・東北文化論。山形、さらには東北一円をフィールドとして、みずからの足で歩き、みずからの眼で見て、みずからの耳で聞く作業を続けている。東北の小さな民の具体的な歴史を掘り起こし、歴史以前の闇のなかに埋もれた（もうひとつの東北）を浮き彫りにしながら、東北学の構築をめざしている。主な著書に、『異人論序説』（砂子屋書房、1985）／『排除の現象学』（洋泉社、1986）／『山の精神史』（小学館、1991）／『遠野／物語考』（宝島社、1994）／『漂泊の精神史』（小学館、1994）／『柳田國男の読み方』（ちくま新書、1994）／『物語からの風』（五柳書院、1995）／『東北学へ』3部作（作品社、1996～98）／『山野河海まんだら』（筑摩書房、1999）／『海の精神史』（小学館、2000）／『東西／南北考』（岩波新書、2000）／『一国民俗学を越えて』（五柳叢書、2000）などがある。



吉増剛造 Gozo Yoshimasu

1939年東京都生まれ。慶應義塾大学国文学卒。詩人。在学中から「三田詩人」「ドラムカン」を中心に旺盛な詩作活動を展開、以後先鋭的な現代詩人として内外で活躍、高い評価を受ける。文学・芸術に関する評論も多い。朗読や現代美術や音楽とのコラボレーション、写真などの活動も意欲的に展開している。主な詩集に『出発』（新芸術社、1964）／『黄金詩篇』（思潮社、1970）高見順賞／『頭脳の塔』（青土社、1971）／『草書で書かれた、川』（思潮社、1977）／『熱風』（中央公論社、1979）／『オシリス、石ノ神』（思潮社、1984）現代詩花椿賞／『螺旋歌』（河出書房新社、1990）詩歌文学館賞／『花火の家の入り口で』（青土社、1995）／『雪の鳥』あるいは『エミリーの幽霊』（集英社、1998）芸術選奨文部大臣賞／『ごろごろ』（毎日新聞社、2004）／『何処にもない木』（試論社、2006）などがある。

られるのかを試してみたかったのです。けれども、一五年やって、その封印を今、ほどこうかなと、ちよほど思っていた時期だったのですね。

もう一つの封印は、僕が東北にやって来て、村に入って東北のお爺さんお婆さんに「聞き書き」をはじめた頃に定めたものです。そのときの言葉のやりとりの中で、自分が東京で使っていた言葉は、ほとんど使い物にならないと痛いほどに感じたのです。村の公民館で講演という形でたびたび呼ばれるうちに、その場の人々に言葉が届くか届かないかということが、僕にとってきわめて重大な問題に

なってきました。ですから、野良仕事をしているお爺さんに届くような言葉を、自分でつくろう、語っていかうと思いました。

その二つの封印というか、理由があって、僕は山形に拠点を移してから、言葉の選び方や文体が、ずいぶん変わったと自覚しています。そして今、僕は徐々に封印を解きはじめていて、自分なりの「場所論」を書きはじめているのですが、これは逆に、誰にも分ってもらえなくてもいいと思っっているのです。ハイデッガー「※4」や、エリアーデ「※5」が出てきたりして、実に楽しい（笑）。そんな、

僕自身のある種の曲がり角で、この言葉、『神秘の樹と明日の鳥たち』に出会って、こういった文体でものを考えることをしていないはずの自分の心が、ザワザワしはじめたのを感じて、「ああ、これももういいよな、許してもらえよな」って、そんな気持ちでここに座っています。

吉増 今の赤坂さんの話を聞いて、もうこれで今日の鼎談は終わってしまったもいいような、そのくらい大切な発語というか、大事なことを差し出して下さいましたね。

さて、次に私はどんなところから話しはじめようかなと、さつきから頭の中で

考えているのですが：今日の会は、はじめにアイヌの言葉から入っていきましたね。そのことにつなげて語りははじめたいと思います。

私は戦争で追われていって、いじめられて、多摩川の傍、横田基地近くの「福生」という街で育ったのです。その福生という地名にね、アイヌ語説があるので。「ふっちゃ」って、かなり揺らいでいるのですが、福生とは「福が生まれる」という当て字ですけれど、子どもの頃から「ふっさ」と発音するたびに、その呼吸に不思議な魔力を感じていました。

実は、五〇才を過ぎてからもうしわだけになって、この詩人、だめになっちゃったな、ぶっ壊れたなと思って、北海道に行つて、石狩川の河口に座つて懸命になつて書いた詩があるのですが、その時に、「福生」というのが、アイヌの人たち：特に女の人たちが、何かを癒す時に吹きかける息だという説が見つかったのです。子どもの時に出会った声色が、そういうところまで影響を及ぼすことがあるのです。それで、赤坂さんの大切な封印の差し出し：「封印切り」だな。その封印切りの恐ろしさに誠意を感じて、

そう言われてみたら、私の方は、全く通じない言葉の方へ向かっているという気がしています。

それとね、これはプライベートな話ですが、ちよほど明日、妻がパリから帰ってくるのです。私は六カ国語を喋るブラジル出身のイタリア系の女の人と一緒になっちゃってね（笑）。言葉が永遠に通じないわけですよ。言葉が通じないと大変ないい方で失礼だけでも、それでも何かを育てなきゃいけない。けれども、いつそ通じなくてもいいとか、そういう極論でもなくて、通じない状態が通じないなりに育まれていく、「生きなおされていく」とでもいうのかな？ そういう日常を、私も生きているのだなと。赤坂さんの封印切りの話、封印を切る時の紙の音みたいなものに衝撃を受けて、そんなことを考えていました。

酒井 ありがとうございます。今のお話でお二人とも全身全霊というか、きれいごとの人じゃないと分りますね。一種の戦いに近い言葉のお仕事を継続されている。

境界／多摩蘭坂／青春の光景

酒井 私は現在、鎌倉に住んでいます。長く務めた神奈川県立近代美術館も鎌倉八幡宮の境内にあるものですから、しよつちゆう俗界と、神域としての八幡

宮の境界を意識していたのです。そんなことをいちいち意識しなくていいのですが、実際にそういう場に公私ともにずいぶんと長く住んでいるものだから、気になっていたところ、赤坂さんの『境界の発生』「※6」を読む機会があつて、その中で、実に見事に、私に言わせれば「死都鎌倉」の過去と現在の境界が、一つの風景として見事に描写してあつて、目から鱗というか、大変なインパクトを受けたのです。

「かつて境界とは目に見え、手で触れることのできる、疑う余地のない自明なもの」と信じられていた。（…）しかし私たちの時代には、もはやあらゆる境界の自明性が喪われたようにみえる。境界が溶けてゆく時代。わたしたちの生の現場をそう名付けてもよい」と。

元来がもやもやしたところのある自然風土の日本で、多少のあいまいさを好むような、われわれの暮らしの風景というのは、皆さんも思い描くことができますよね。しかし、現代の鎌倉に長年暮らしている私に、ドスを突いてくるように迫ってきたのが次の描写です。

「たとえば辻や橋のたもとは、かつて妖怪や怨霊たちが跳梁する魔性の空間と信じられていたが、境界に対する感受性の衰えとともに、私たちはそれを魔性の

※6 『境界の発生』（きょうかいのはつせい）

著者 赤坂憲雄
文化や歴史の昏かりに埋もれた境界の風景や人々を発生的に掘り起こした論考（砂子屋書房、一九八九年／講談社「講談社学術文庫」、二〇〇二年）。

※4 マルティン・ハイデッガー（Martin Heidegger）
一八八九—一九七六年／哲学者
ドイツ生まれ。カトリックの思想から大きな影響を受け、現象学の手法を用い存在論を展開した。一九二七年、代表作の『存在と時間』で存在論的解釈学により伝統的な形而上学の解体を試み、出版後一夜にして世界的な名声を博す。

※5 ミルチャ・エリアーデ（Mircea Eliade）
一九〇七—一九八六年／宗教学者・宗教史家・作家
ブカレスト生まれ。主に幻想小説および自伝的小説で有名。八つの言語を使いこなした。大学卒業後インドへ留学。インド哲学、ヨーガなどを研究しブカレスト大学講師などを経てシカゴ大学神学部宗教学教授に就任、世界的な比較宗教学研究に努めた。日本に於いては宗教学者としての堀一郎（柳田國男の女婿）と親交があった。著書に「永遠回帰の神話…祖形と反復」（未来社、一九六三年）、「シャーマニズム」（ちくま学芸文庫、二〇〇四年）、小説「マイトレイ」作品社、一九九九年）、「ムントゥリヤサ通りで」（法政大学出版局、一九七七年）など。

モノや空間そのものを喪失してしまった。そうして世界はいま、魔性ともカオスや闇とも無縁に、ひたすらのつべりと、明るい均質感に浸されている。

これは衝撃でした。東北にくる前に、日本中あちこちを、こういう観点で眺めていたのですか。

赤坂 『境界の発生』は、僕が三〇代前半に雑誌や何かの求めに応じて書き散らした文章をまとめた本なのですが、今読み返してみると、自分でもわけが分らないことがたくさん書かれているのです。今、酒井さんにご紹介いただいた鎌倉に関する記述は、その中でも比較的分かりやすく書かれていると思います。僕はその世界を捨てるために山形に来たような気がしますね。それを検証するために来たのではなくて。

僕は、「異人」とか、「境界」とか、「サクリファイス」とか、そういうある種の解釈の道具を、ごく若い頃に掴んでしまったのですね。この三つで現代の事件も風景も読み解ける、とても便利な道具があると。でも、僕はその文法が嫌になってしまった。「もうこれいいや、これ捨てちゃおう」と、東北に裸で来たのです。それまで東北の闇なんて、一つも探し歩いたことはないですし、むしろそこから抜け出すために、東北というフィールド

が僕にとって必要だったのだと思います。ところで、吉増さんのお仕事をいろいろ読んでいた中で、『恋の山』^{※7}が気に入りました。これはおいくつ頃の詩でしょうか？

吉増 一九七一年くらい。三〇代の頃か…もうちょっと若いかな。

赤坂 その中にこんな一節がありました。「国分寺近く、多摩蘭坂のはげの大傾斜へ」。これ、僕の暮らしている場所にすごく近いのですね。多摩蘭坂はよく自転車ですつたり登ったりしていました。それで何を思い出していたのかというと、実は僕は、二〇代の頃は小説を書いていたのです。それで、ああ、もうこれはだめだなどと思って、三〇歳になる手前でやめたのですが、その境目の二〇代後半、高校時代から通っていた国立の小さな書店で、偶然に『定本柳田國男集』^{※8}に出会ったのです。

値段を見たら四万五千円でした。当時の僕はとても貧しくて、お金はほとんどない生活ですし、全集なんて買ったことがなかったのですが、なぜかその『定本柳田國男集』を買ってしまった。ダンボールをもらって、自転車の荷台に取り付けて、ふらふらしながら多摩蘭坂を登っていったのです。そのときの坂の途中で、僕は山口昌男^{※9}さんに会っている

のです。勿論、本当には行き違っていますよ。たまたますれ違った人を、勝手に山口昌男だと決めたのです。幻想ですけれど（笑）。僕にとって多摩蘭坂は、そういう絵柄におさまっています。一生懸命に自転車をこいで、「買ってしまっただ」柳田の全集を積んで、ふらふらしながら坂を登っている。そのとき、『定本柳田國男集』に出会っていなければ、僕は民俗学の世界には進んでいなかったと思います。それから何年かして、小説をきっぱりやめて、『異人論序説』^{※10}を書いてデビューし、それから『境界の発生』を発表します。

さきほどの、吉増さんのお話を聞いていて、なんだか『定本柳田國男集』、多摩蘭坂、山口昌男さんの亡霊、その辺が絡み合って、二〇代の僕の青春の光景が呼び出された気がしたのです。

酒井 いや、吉増さんふうにいうと、私も時々使うけれども、「溝」という言葉が浮かんできましたね。どうも聞いていると、赤坂さんは断絶する、あるいは捨てるということが上手な人ですね。**吉増** そうですね。それと同時に、とても気持ちいい、その坂の光景がきれいになってくるじゃないですか。

多摩蘭坂というのはね、大岡昇平の名作、『武蔵野夫人』^{※11}の舞台で、「はげ」

とは崖地のことですね。「多摩蘭」とはおそらく、「たまらねえな」からきている。不思議な大きな坂ですよ。しかし、坂が出てくるところがまた赤坂憲雄さんらしいけれど、その上、あんなすばらしいシーンに山口昌男さんまで出てくるとはなあ…何か聞いていて幸せになってきた（笑）。

それからね、この間、NHKの、『こだわり人物伝』という番組で、柳田國男の特集に出演したのです。そのときにね、柳田が生まれて二三歳まで過ごした辻川という、兵庫県の姫路の先まで行ってきました。柳田國男は幼少の時分に、三木

さんという家に放り込まれたのですが、そこは大庄屋で書物がいっぱいあって、本を読みふけたという。「よし、じゃあその書物蔵に行ってみよう」って、カメラクルーと一緒に潜っていったら、書物蔵なのに本がない。よくよく見ると、下駄箱の中に紙の束がいくつか置いてあって、その戸をさらに上げると、和本がね、ずーっと積み重ねてあるのです。手にとって一つ一つ見ないと、何が書かれているのか、積まれている状態では皆目わからない。

そのとき私は、ハッと感心したのです。図書館から持ってきた、あのキンキラキ

※7 『恋の山』（このやま）著者 吉増剛造
「経・吉増剛造詩集」内の詩論（リズムの魔に吹かれて恋の山にいたる）から思淵社、一九九四年。

※8 『定本柳田國男集』（ていほんやなぎだくにおせんしゅう）著者 柳田國男
膨大な柳田の著作を、柳田の指示のもとに、自筆及び著者校訂のあった筆記原稿に限って収録した定本集。全三十六巻（筑摩書房、一九六二～一九七四年）。

※9 山口昌男（やまぐち、まさお）一九三一年／文化人類学者
北海道美幌町生まれ。東京都立大学社会人類学専攻修士課程修了。該博な知識を背景に、アジア・アフリカなど世界各地のフィールドワークを行い、「中心と周縁」「トリックスター」等の概念を駆使して専門の文化人類学から演劇、映画、文学まで幅広い研究・著作活動を展開している。一九九六年に『改訂の精神史』（岩波書店、一九九五年）で大佛次郎賞受賞。主要著作は『山口昌男著作集』（筑摩書房、全五巻、二〇〇三年）に収められている。

※10 『異人論序説』（いじんろんじよせつ）著者 赤坂憲雄

内部／外部、秩序／混沌といった共同体Ⅱ「我ら」とその外部Ⅱ「彼ら」の二元論的關係性をその両者のはざまに棲む人々Ⅱ異人に沿って考察する一冊（砂子屋書房、一九八五年）筑摩書房「くま学芸文庫」、一九九二年。

※11 『武蔵野夫人』（むさしのかじん）著者 大岡昇平

大岡昇平の代表作の一つ。若き復員軍人の勉と、その既婚の従姉の道子との悲恋を扱った物語。家族の人間

的な關係の綾が描かれている（新潮社、一九五〇年）。

※12 『アーキペラゴ』（Archipelago）著書 今福龍太、吉増剛造
現代世界の文化の混交と変容をどのようにとらえるのか。クレオール主義を提唱する人類学者今福龍太氏と、言語の解体と創造をライカルの追及してきた詩人吉増剛造氏の一六年にわたる対話（岩波書店、二〇〇六年）。

※13 今福龍太（いまふくりゅうた）一九五五年／人類学者 文化批評家
東京生まれ。カリフォルニア、メキシコ、カリブ海、ブラジル、沖縄、奄美などを移動しながら、幅広い批評活動・文化運動を展開。現在、東京外国語大学教授。

※14 ヴァルター・ベンヤミン（Walter Benjamin）
一八九二～一九四〇年／文芸評論家
ドイツ生まれ。フランクフルト大学、ベルリン大学に学ぶ。文化社会学者として、史的唯物論とユダヤ的神秘主義を結びつけた。エッセイの才たちを採った自由闊達なエッセイの豊かさや文化史、精神史に通暁した思索の深さ。二〇一二年の都市と人々の有り様を予見したような分析には定評がある。著書に『ドイツ悲劇の根源』（法政大学出版局、一九七五年）、『複製技術時代の芸術』（和伊國屋書店、一九六九年）、『モスクワの冬』（一九八二年）、『子どもたちの文化史』（晶文社、一九八八年）、『パサージュ論』（一九九三年）など多数。



酒井忠康 Tadayasu Sakai

1941年北海道生まれ。慶応義塾大学文学部美学美術史学科卒。64年神奈川県立近代美術館勤務。92年館長。2004年同館顧問。世田谷美術館館長に就任、現在に至る。その間、数多くの企画展を担当。全国美術館会議理事。美術館連絡協議会理事長。国際美術評論家連盟会員。日本近代の美術史に造詣が深く、芸術家の風土性や気象をベースにした美術評論に特色がある。目下、パブリック・アートの現状について調査中。1986、88年ヴェニス・ビエンナーレのコミッショナー。1989、91年サンパウロ・ビエンナーレのキュレーター。多数の著作・著書の主要なものうち日本近代美術史に関するものとして『海の鎮—描かれた維新』（青幻舎、2004）／現代彫刻に関するものとして『彫刻家への手紙』（未知谷、2003）／美術館活動に関するものとして『その年もまた—鎌倉近代美術館を巡る人々—』（鎌倉春秋、2004）などがある。



※16 彫刻風土一時の潮上—
舞踏=森繁哉
彫刻=西雅秋
日時=2004年10月28日[土] 17時30分～
会場=東北芸術工科大学水上能舞台「伝統館」

「※12」という対談集の中で、文化人類学者の今福龍太(「※13」)さんと交わされていたペンヤミン「※14」の靴下の話にながったような気がします。

吉増 そうそう。これは全世界の子どもがやることだと思っのですが、靴下を裏返しにして履くと、どっちが裏だか表だかわからない。「ケツ頭」とかいって遊ぶでしょう? 着物だって襦袢とらだつて、どっちが表だかわからないような感じがする。ペンヤミンもその遊び方をしている、そのクタクとした不思議な手触りを、実に見事に表現していますよ。

記述も残っていて、様々な問題が山積しているのですが、それはともかくとして、「僕は『遠野物語』には、学問的な「區別」以前の、カオスがあるからこそ面白いと思っっているのです。

僕が東北の山野を、お爺さんお婆さんの話を聞き書きして歩いてたとき、つくづく実感したのは、あれは「神話」、これは「伝説」、あれは「昔話」、これは「世間話」だ、「民話」だとかいう、学術的な分類のフィルターは、常民にとって何の意味もないことでした。つまり、自分のライフストーリーを語っているうちに、その地域の「伝説」が物語化して紛れ込んでしまう。あるいは世間話のようなうわさ話が、よくよく聞いていると村の「神話」のようなものにつながっていくのです。とてもじゃないけれど、学問的な分類が意味を成さない、混沌とした世界がそこにあったのですね。『遠野物語』というのは、ギリギリのところでのカオスを掬い取っている。だから面白いのです。

けれどもその後、『遠野物語』の伝承世界を学問的に取り扱おうとする取り組みが盛んになって、海外から様々な研究が入ってきて、収集や分類上の語彙とかか文法が整理されていった。その結果、「伝説と昔話は違います」と、柳田の学

今夜は、このあとの森繁哉「※15」さんの踊り「※16」を見るのを楽しみにしているのですが、土方巽「※17」にもそういう感覚がありましたね。蟬が引つかいたような、どっちが布団だか本体かわからないような…。ああいう表裏一体の身体性というのは、ほうつておくと忘れてしまう感覚ですよ。

定住の鳥・漂泊の樹木

赤坂 この辺で、今回のシンポジウム

問は、人々が生きている現場から遠ざかっています。そんなものが学問ならばどうでもいいと、僕は思ってしまうのです。それがまず一つです。

次に、柳田はこのエッセーの中で、小鳥は移動し、樹木は土着しているものとして語っていますが、ここでは、柳田の樹木研究が破綻していますね。実は、小鳥の移動範囲はきわめて小さいのです。チーチク、チーチクとさえずりながら、それが隣の村の小鳥に伝わったというレベルの伝播はしたとしても、小鳥そのものの生息の範囲は意外に狭い。

それに対して、樹木はとても大きな移動を繰り返しています。たとえば、椿という樹木については、ほかならぬ柳田國男自身が、稲を持って日本列島を渡ってきた人たちが、北へ北へと旅をする途中で、「神の宿る場所」に椿を植えていったという話を繰り返しています。ですから、日本の椿は、自然の産物じゃなくて、人間が外から持ち運んだ文化財だという理解が正しいのです。歴史を丁寧に辿っていくと、樹木はものすごく動いていて、土着のメタファーを負わせるにはいささか無理があるということですが、さらに付け加えると、これは養老孟司「※21」さんに聞いた話で、詳細は不確なのですが、養老さんは「昆虫は動いてな

のテーマになっている、柳田國男のエッセイ「傳説とその蒐集」について、僕なりの見解を述べておきたいと思います。僕は今回、吉増さんの『生涯は夢の中径』(「※18」という、折口信夫に関する、絶妙というか、ある種、形容しがたい詩の実験を読ませていただいたのですが、その中で柳田國男は常に悪役なのです。ですから今日の鼎談では、民俗学者としての立場上、柳田擁護にまわらなければならぬという気持ちがあったのですが、本当は僕も折口のほうが好きなのです(笑)。酒井さんには申し訳ないのですが、柳田のこの短い文章を繰り返して読んでいくうちに、やはり批判せざるを得ないという気分になっています。

柳田は、「人はよく傳説と昔話を混同する。然し學問はこの二つを區別する」と言い、続けて比喩的に「傳説が植物なら昔話は小鳥に似て居る」、こういう語り方が上手いですよね。小鳥は「漂泊」とか「移動」といったメタファーを負われ、樹木は「土着」の表象として語られている。僕はそれが気に入らないというか、ちよつと違うなと思うのです。

まず、柳田の『遠野物語』(「※19」)は、この文章から二〇年近く前に出版されているのです。遠野地方の民話については、佐々木喜善「※20」という語り部の「移動」とか「定住」ということを我々が思考するとき、虫なんて小さな生き物は、ほとんどん移っているような気がしますが、実際は百万年前からあまり移動していないのです。そして小鳥は動いているように見えて、確かに渡り鳥はいますけれども、鳥たちの多くは実際にはあまり大きく動いていない。その反対に、「根つき」のイメージのある植物は、人間の歴史とともにドラマチックに移動している。そういうイメージをここに重ねると、柳田の「傳説が植物なら昔話は小鳥に似て居る」といった比喩的な対比を、もうひとつ別のところからひっくり返して考えた方がいいと、僕は思えてならないのです。

吉増 確かに、赤坂さんが明晰におっしゃったように、柳田國男は、稲と麦だけではなくて、白珠椿の小枝を持って、何万年か前にこの列島に渡ってきた人たちがいたと語っていますね。しかも、椿を「心霊をトする」と植えていたのは女の人だったと。そういう想像力というか、全身聴覚のようなイメージは、柳田の独特のものですね。

※15 森繁哉(もり・しげや)
一九四七年/現代舞踏家
山形県生まれ。「水の踊り」庭、パリエーションズ」など、数多くの舞

台作品の他、道路での表現活動「第一次」「第二次道路劇場」を経て、出羽三山山中で「千の行」を展開。大蔵村を本拠地とし、主宰する舞踏集団「里山ダンス事務所」を構成する村人たちと「すすき野アター」を運営。また、土地の生活記録としての舞踏表現や、野外オペラシリーズの演出を通じて、人々との文化ネットワークを創りあげ、文化伝承の講座として南山夜学校」を開設し職人の技術伝承にも力を注いでいる。さらに「身体民族学」という独自の理論を構築。その多彩な活動によりインタークロス賞、山形県社会文化賞等を受賞。現在、東北文化研究センター教授。

※17 土方巽(ひじかた・たつみ)
一九二八—一九八六年/舞踏家・振付家
秋田県生まれ。舞踏の創始者。暗黒舞踏という新しい表現形式を確立した。西洋の古典舞踊が人間の肉体を肯定的・発展的にとらえ、美的で伸びやかな振り付けによって人間のロマンを表現したのに対し、土方は解体され衰弱に向かう肉体の動きを美しさを見出し、ジャンルを超えて様々な芸術家たちに影響を与えた。上演作品に『禁色』(一九五九年)、『ひとがた』(一九七六年)などがあり、一九七七年に演出した『ラ・アルペンチーナ頌』は舞踏の最高峰として伝説的な上演となった。著作に『美貌の普空』(筑摩書房、一九八七年)などがある。

※18 「生涯は夢の中径」(しようがいはゆめのなかみち)
著者 吉増剛造
折口信夫の生涯の軌跡を求め、これまで誰にも読み解かれることなかった、この類稀な文学者の特異な追求を、東北文化研究センター教授。現在、東北文化研究センター教授。

※19 「遠野物語」(とおのものがり)
著者 柳田國男
一九一二年に発表の說話集。岩手県遠野町(現、遠野市)出身の佐々木喜善によって語られた地元の民話を、柳田が編纂したものである。その内容は、河童や座敷童など妖怪に纏わるものや、神隠しなど怪談系のものを多く含む。「遠野物語」本編は一一九話で、続いて発表された『遠野物語拾遺』には二九九話が収録されている。

※20 佐々木喜善(ささき・きぜん)
一八八六—一九三三年/民話研究者
岩手県遠野市生まれ。一九〇五年頃から佐々木鏡石の筆名で小説を発表し始め、一九〇八年頃から柳田國男に知己を得、喜善の語った遠野の話をもとに柳田が『遠野物語』を著す。作家活動と民話の蒐集、研究を続ける傍ら、土淵村村会議員村長を務める。オシラサマやサシキワシなどの研究と、四〇〇編以上に上る昔話の蒐集は、日本民俗学、口承文学研究の大きな功績で、「日本のグリム」と称される。主な著作に、昔話集『紫波郡昔話』、『東奥異聞』、ほか多数あり。ほとんどの著作は「佐々木喜善全集」(遠野市立博物館発行)で読むことができる。

そしてまた柳田は、みなさんもご存知だと思いますけれど、鳥をよく観察している人です。ここにも小鳥が出てきたから要注意ですよ。何か考えているに違いない。きっとそこにもう少し深いトリックも含まれている。そうした口をつぐんでいる様子というのか、どこか複雑で謎めいたこの人の真性を通路にして、日本に民俗学といわれる学問の扉が開いていたというふうに、私は思いますけれどね…。

そのときにね、民族とか昔話ではなくて、今日のシンポジウムもそうですけれど、何度も聞いて、話を重ねていく作業によって、物語にある種の「溜り」ができていく。それを「記録」とか「記憶」とか名付ける必要はなくて、語ることを重ねていくことで、様々な学問の境目が消えていくかもしれない。あるいは他人の記憶を今一度たどり直してみるとかね。そういうことの、とても珍しく、良い例として、柳田國男の存在や著作があると、いうふうに私は思うわけです。

酒井 なるほど。これはなかなかややこしい立場に私は立たされました。議題の提案者として、さきほどの赤坂さんの論に対する、私なりの柳田弁護をしなくてはならないのですが、とんでもない、私がそんな担い手ではないことをみなさん

は既にご存知ですね。

しかし、例えば伊藤若冲「※22」の絵には、いろいろな魚や貝類など、実に多種多様な生物のモチーフが一举に同じ空間にドンと描かれているわけですね。これを生態学的にいろいろと調べていくと、絶対いるわけがない魚も含まれているはずですよ。やつぱりそこには、この画家一流の想像力が介在しているわけですね。いわゆる博物史や博物学の見方をする、やはり若冲や柳田國男が生きた時代には、そういう生きもののたちの「図鑑的な世界」というか、ある種の全体性が、多少ぼんやりとはしていても、うっすらとした予感の向こうに見えていた時代だと思ふのです。けれども徐々に日本の近代化が進むにつれて、そこに挟み込まれた彼らの想像力が、時代の検閲を受けるような形で、はつきりくつきりと、否定なく他と区分するように視覚化され、認知され、解体されていくのですね。

〈「佃新報」をリ・テリングする〉

吉増 あれは一九八四年でしたが、多摩美術大学に講義に呼ばれたときからはじまった習慣で、私は壇上で喋ることを、前の日の朝にあらかじめ詳細に書いて

準備していくということが続いています。その辺から詩はだめになっていったのですが、ともかくこれを、自分ではフリーペーパーと名付けた、あるいは「佃新報」だと書いたりして、その日に皆様に差し上げているのです。お土産コピーですね。

私はお土産って、どうしても差し上げたいのです。いつか恐山でイタコの話を聞いていたら、若い亡霊が出てきて、「おれは靖国に入ったけれども、お土産も貰えねえで」なんて口寄せしているのを見て、「これは大変だ、お土産というのの大事なのだ」と思って、それ以降、気をつけるようにしているのです(笑)。今夜は、せっかく二度とないような充実した話になっているので、リ・テリングⅡ再話するというか、私自身が書いたものを発語してみることによって、どんな風になるか変わっていくかという実験をしてみたいと思います。

※21 養老孟司(ようろう たけし) 一九三七年/解剖学者 神奈川県鎌倉市生まれ。東京大学医学部卒。一般的な心の問題や社会現象を、脳科学や解剖学をはじめとした医学・生物学領域の豊富な知識を交えながら解説することで多くの読者を得た。「現代思想」(青土社)に連載した「唯脳論」(筑摩書房、一九九八年)で注目され、「バカの壁」(新潮社、二〇〇三年)の大ヒットにより広く知られる。一九八九年に「からだの見方」(筑摩書房、一九九四年)でサントリ学芸賞を受賞。その他テレビ出演や講演会などを幅広くこなし、また、無類の虫好きとしても知られている。現在、東京大学名誉教授。

※22 伊藤若冲(いとうじくちゅう) 一七一六―一八〇〇年/画家 京都生まれ。江戸中期京都画壇を代表する画家の一人。二三歳で家督を継ぎ、家業のかたわら狩野派、光琳派や中国の元代、明代の画法を学ぶ。四〇歳で家業を弟に譲ってから、生涯妻子を持たず絵画の制作に専念。写生的、装飾的な花鳥画と水墨画に異色の画風を作り上げた。数十羽の鶏を飼ってその形状を写し取ったという逸話があり、動物や鳥獣魚介、植物、野菜を題材にした作品が多い。一九七〇年に辻惟雄の「奇想の系譜」が出版されて以来注目を浴び、特に一九九〇年代後半以降その超絶した技巧や奇抜な構成が再評価された。

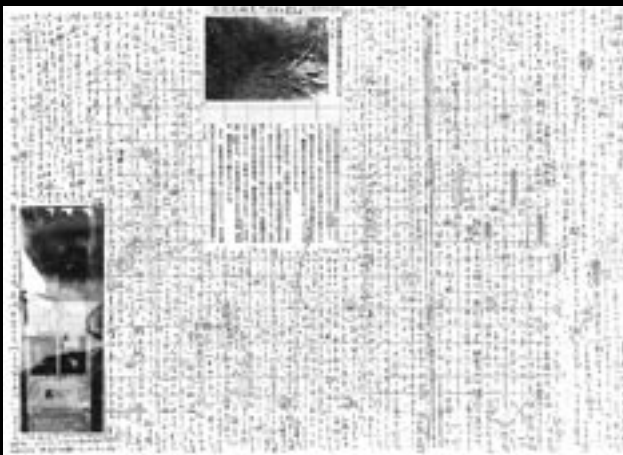


えーと、こういうタイトルをとってもいい感じで口ずさんでいて、ゆっくりした、これ、何かどこかで、酒井さんの友情が働いているのですね。何か景色が浮かんできて、それで…寒いですね、山形ね。そろそろ雪の便りが聞こえてくるかもしれないような訪れを耳にしようとして、すこし怯えているのかも知れません。けれども、そういう「一期一会の時に「やまがた」これ、ひらがなで書く」と違うな。そうすると「もがみ」って出てくるかな。「まぎの」って出てくるかな、少しにこったような、それを聞く無量の心のアンテナのひとつ、芭蕉さんの「雲の峰いくつ崩れて」。この「崩れて」という崩壊感覚が芭蕉さんなのですが。この山形、最上、牧野に、そろそろにじり寄るようになっているらっしゃい…と呼びかけてくださいました。とても丁寧にお誘いいただきましたことに対して、まず挨拶してしまえいけないうすからね。頭をたたいてお礼申し上げます。先ほどの柳田さんの、それぞれの枝ぶりが異なっているというところに関わると思いますが、こゝして、その日その日の催しや、お教室、その都度ここにこうしてフリーペーパー、最近では『佃新報』とか申しておりますが、今日の皆様への枝ぶり…今日の朝刊…山形版か山形新聞…ということになります。実は昨日の夜、サンチャという所、三軒茶屋ですけど、そのシアターラムと言うところで、『サミュエル・ベケットを読む』という恐ろしい催しがありまして、そこでもフリーペーパー、佃新報の一月二十七日夕刊ベケット版を組んでいきます。その枝振りを戦（そよ）せるようにして、別の声、私がしゃべっているのですけど、それはすでに別の声で、リ・テリングしました。そのときに、最後にうまく読み解けなかった、ベケットの幼い時の目が、うまく読み解けなくて心に傷が残ったりすると、それが、心の傷が、またひとりりで動きだして、何か動いてくはずで。で、この山形版を筆耕して、筆を耕すようにして、筆耕しているのは当たっていますよね？ 紙に筆で耕すようにして、幻想まじりですけれども、おそらくベケット…三分の一くらいベケットの目になって、山形か秋田か、青森のハナノワのような、大昔の人の目が、さっと見えたような気がしてきました。あるいは、今日一緒に居る長年の友の酒井忠康さんは確か古平か糸市だった？ の出身であるし、それで…まあ今日のちよつと守り神みたいだけと天才彫刻家だった、西雅秋さんのお師匠さん筋に当たる、若林奮の偉も、ここに立っていて、ありうべからざる小川の湧き水のようなものから、出てくるのをささやいている。そういう耳をさらに開くようにして、そうして、こういう、次のようなベケットの目を読んでいた。これ、ベケットを読んで勉強していたとき、劇作家の中に囲い込まれちゃって、不条理劇とか、『ゴドーを待ちながら』だとか、そういうところで身動きとれずに脚本見せられたベケットの、もつと病んだところを引っ張り出そうと思って、昨日はジョン・キーツを読むベケットというこゝで、話をしたので。みんな、困っちゃってましたけれど、そういう目があります。そこでもう一回引いた、最後のベケットの、最後に引いてうまく読み解けなかったのは、幼いころベケットは、「いつのまにか一人で海岸沿いをさまよっていたり、じっと身動きひとつせず

んで、柳田さんも遠野物語の序文で、早池峰のことを、「かたかなへの字に似たり」ってこゝろ、すこいですね。しかも、ほかの写真には撮影者の名前が入っていましたので、これは入ってなかったで、多分この逆光のすこい写真は、僕がみて思い込んで、これは、完璧に、このすこいページ、ページがすこい。このページの目は、赤坂さんの目であると言うふうな確信が、この恐るべきくの字の道―坂への道を上っていくことになるんだろうと思います。で、これ、鎌倉のこゝろで目が留まったのは、もちろん酒井忠康さんは神奈川県立美術館の美術館長として、長年勤められたことがありますし、その鎌倉を見る目がするのでびっくりしているわけですよ。この、でこぼこ急坂ひかり道を、どういふふうにして、こういう驚きをこれから私たちが紡いで解いていったらいいんだろうか。昨日の夜、三軒茶屋の劇場ラムの学者たちと、話したくねえと思つて、無性に嫌になつて、飛び出してきちゃったその寸前に、能代の秋田の人…吉田文憲さんと、とっさに抱き合うようにして立っていたことがあって、赤坂さんと吉田文憲さんは、非常に親しい、両方とも小説書くような気質がある。しかも、吉田文憲さんも、いつか『麒麟』と言う雑誌に二〇年近く前ですけどね、これとよく似た写真をお撮りになっていました。どうもその、赤坂さん―この坂を見てから赤坂さんって字が見える、何か胸騒ぎしますけれどね。このページの光に目が釘付けになったのは、ベケットの、石が傷つかないようにそつと庭の木の枝に乗せておいた、の、その「乗せ」と「運び」のコレスポンダンスでもあった。それも、恐ろしいような気がします。中上建次さんとも親しかった、吉田文憲さんが撮った写真も、染み込むようにした「紙の瞳」のようなものと、交差しているのかもしれない。それと「化粧坂」という言葉を選んでいる、これも機織のこゝろで、いかげんについて、その目の機織（よこれ）によつて触る、目の機織（よこれ）の境界に触りはじめたな、これも、誰がいつているのかな…もうささやくといつても、口辺のささやくという字が書けないから「焼く焼く」って書いて、赤坂さんの列のページに目を落として、とたんにこゝろが立ちはじめた。目の機織の境界に触るなんていうことが、ポーンと立ちはじめた。酒井さん、どういふふうにしてこゝろの言葉の光を、手の枝に乗せて運んだりするようなことが起こるのかしら。実際に手を動かして何かか咄嗟に立ってくるということが、詩とか芸術といふばかりじゃなくて、わたしたちの生の、これから書く、何か、間断なき、必要なことではないのかしら。酒井さん、どう…。いつも酒井さんの傍にいらしたい、一種の誘ふべき偉人でしたけれどね、砂澤ヒッキという人に、何か…本当はこんな話なかったけど、呼びかけているような気がします。で、「トーン」って言うのがアイヌ語で「湖」って、いう意味もあるんですけどね、「遠野」って書かないで、「トーン」で水の香りをかいだりするようにしていますすけれど、牧野の木村迪夫さんと森繁哉さんに、十年ぶりにお会いできます日に、なんていしょうね、このペーパーは、自分でも驚いていました。この

に、海を見つめて立っていたりすることがあった。で、こういうとき、彼はある種の石への愛着と自ら呼ぶもののにのめりこんでいった。特に気に入った石を海岸に見つけると、波による摩滅や、移り気な天候から守るために、その石を持って帰った、と語っている。そしてその石が傷つかないように、傷がつかないように、そつと庭の木々の枝に乗せておいた。これうまく読み解けなかった。これ、ちよつと…すこいなあという…まあベケットの物語の中にいっばい出てきますし、アイルランド、スコットランド、イングランドに行かれた方は、あの地層の古いスタンディングストーン、ストーンサークルのことをご存知でしょうか、そういう風土が浮かんでくるわけですけども、こんなしぐさを僕は初めて読みました。それで今日のお世話役である学芸員の宮本武典さんがカラーコピーしてくださった、この右の黄色いところが見えるはずですけども、この、石が傷つかないようにそつと庭の木々の枝に乗せておいた。こゝを見ていくと、なんだか若林奮さんの目と一緒に見ているような気がしてきた感じですけど、そうすると昨日読みきれなかったことが、私の耳元に近づいてきて、戻りはじめたかもしれない。この枝振りのような空気の風が…立ってきて、私も、東北道の古川か、一関あたりまでしか開通していない時に、下へ降りて、何だっけ、八号線だっけ？ あれを走ったことがあるんですけど、そうして走っているときに、大湯とか花輪とか言いますけれども、むしろ僕の感じでは十和田町にある、ストーンサークルがありまして、それを見たときに、ペーが二つあるのですけれどね、あるいは酒井さんの故郷に近い、これ、せひ行ってみてください、素敵なストーンサークルがあつて、小樽の近くの忍路（おしよる）というところにあります。このかわいらしいストーンサークルの驚くような石の寄せられ方。こうした、むしろ天才と言うよりも狂的に近いようなベケットの、石が傷つかないようにそつと庭の木々の枝に乗せておいたという、こゝろしたしぐさというか、裂開（すきま）というようによつて、これが見えた。これは当然ベケットを読む目でもありません、実はこれは、アイルランドやスコットランドばかりじゃなくて、おそらく三内丸山もそうだと思いますけれども、太古の人たちの、しぐさの背後の空気の光みみたいなものがスーッと、この狂的なベケットのしぐさによつて見た。昨日はそれがいえなかったですけれども、今日は、これを皆さんに差し上げようと思つて、小さなメモつていう感じで、来ておりました。こんな、こういうふうにして揺ざぶるようになっていふこゝろで、宮本さんから送っていただいた、先ほどの赤坂氏によつて、『境界の発生』を読みはじめ、すぐに十八ページの、鎌倉のこの写真のこゝろで目が釘付けになりました。白状しますけれども、赤坂憲雄氏によつて、私たちの貧しい界（さかい）読みと言うのは、こゝろからね、今日始まつていくのです。え、「知られざる鎌倉を紡ぐ小さな旅を」よくもまあ紡ぐなんて書いたなあと思つてますが…いやいやまあ、普通は「たどる」とか何とか書くはずですよ。「わたしたちは一つの坂から始めることにしよう。化粧坂―」。うまいねえ…。そうして、「くの字型に鋭く折れる急坂で」な

山形新聞の部分は、拘めども尽きない尽きない手の、運びの庭です。坂です。坂です。と、ここまで書いて、赤湯あたりにて書いて、あ、これは…『啄木新聞』だなんて、手が…書く、書くなんていう言葉を使わなくてもいいかもしれないな。つつくでもないけど、ついでに書いてね、こんなことするから、朝日新聞、読売新聞から注文がなくなつてね（笑）。どうぞ、こんなこと。しかしこれは、こゝろした、なんていうのかな、ま、戦いなんて簡単に言いますけれども、こゝろいうことを習慣化して、間断なく何かを立ち上げていくってことが、喜びに変わるようなことがあるはずですよ。そういうこと、柳田さんがなさつてたこと、あるいは赤坂さんがおやりになっていることは、また違うことだといふふうに私は思います。最後に一点だけ、この写真を貼り足しておきましたけれども、僕は写真家でもあつて、その、ついでこのあいだ福島で、すでに撮つて来ていた、ブラジルのパラチの写真と、それからサンパウロの夜景の青い光の夜景とを重ねた上に、何でもいいかと思つて、福島風景を撮つたのですよ。意味がなかったな、これ…出来たらこんなだった。あ…、「目の無差別性」にたどり着いた。



P.06-07 カラーページ図説参照

酒井 吉増さん、たいへん魅力的な朗誦をありがとうございます。

アイルランド出身の劇作家であり、ノーベル賞を受賞した偉大な文学者、サミュエル・ベケット〔※23〕の名前が出てきましたね。吉増さんはベケットにたいへん共感を持っておられて、たびたびアイルランドへ旅行されていますが、ケルトの魂っていうのは、ある対象に近づいたら、その近づいた距離だけ遠ざかっていくという考え方ですね。

ベケットやW・B・イエイツ〔※24〕といった、アイルランドの詩人たちに共通した、そうした「遠のく」一面が、今、吉増さんが確かに語られたように、赤坂さんの『境界の発生』の文中、「知られざる鎌倉を紡ぐ小さな旅を、わたしたちは一つの坂から始めることにしよう。化粧坂——」というくだりにも符合してきて……これはちよっと堪えましたね。

ベケットの石／境界感覚の素質

赤坂 僕からも吉増さんの発声に応答してみたいと思います。ベケットの石……柳田も石にこだわりましたよね。石って、不思議ですよ。八戸の方では、イタコも海岸で石を拾って、石に自分の魂を込め

るそうですね。

これは石にまつわる個人的な体験なのですが、対馬に行ったときのことです。青海と書く、とても素晴らしい村があったのです。あまり人に教えたくないくらいに美しい海際の村です。そこに寄神社という、海からやってくる神を迎えるための神社が海岸にあった。男三人で旅をしていて、その神社の前の浜に降りたのです。すると、その海辺には、どうしたわけか、まあいい、本当に丸い石が、あたり一面にあったのです。それを男三人がものも言わずに、狂ったように拾いはじめて。

もちろん、そのとき僕も夢中で拾って、その丸い石を、しばらく自宅に置いておいたのです。そうしたら、柳田は「石は成長する」と言っていますけれども、球体だった石が、いつの間にか小さくなってしまったのです。まあいいのだけれども、平たくなってしまつて……。そんなはずないですよ（笑）。と、僕も思ったけれども、石つてもししたら、成長するのかもしれないと思った。いい加減な話ですね。

ベケットは石を傷つかないように、そつと庭の木の枝に乗せておいた。これも海岸から拾ってきた石ですよ。ベケットの、そういう独特な感覚には、アイル

ランドの風土やケルト文化が、背景として決定的に作用していたと思うのです。

フランスやドイツの人たちが、石に対するこういう執着を持つとは、僕は思えない。だから、石に対する執着で風景や記憶、土地の歴史とつながっている感覚というのは、理屈ではなくて体験を通して、僕もすごくよく分るというか、伝わってきますね。

酒井 石といえば、萱野茂さんの『アイヌの碑』〔※25〕にも、「川石をやたらと動かすな」とか、「石があらゆる時代の記憶をそこに集積している」ということが書いてありました。アイヌの人々は、河原の石の配置を見て、いろいろな占いをするものだから、川原の石をむやみに移動させてはいけない、とね。

私の友人の彫刻家・砂澤ビツキ〔※26〕は、もうだいたいぶ前に壮絶な死に方をしましたが、彼と会つていると、どういったらいいのか……こうしたアイヌの人特有の、天のものは天に返すっていう感覚が、ごく自然な形で会話の端々に出てきてね、そういうベケット的な感応力を感じました。

吉増 奄美大島や沖縄では、石の「育つ」ことを「ほじとすり」という言葉で表します。水の中では珊瑚も育つし、石も育つような世界があるんですね。そ

積されてきた民俗資料が、いま吉増さんがおつしやつたような読まれ方をするなら、これはとても幸福なことじゃないかと思えますね。つまり、今日、ここにいる若い人たちにとつて、民俗学の世界はほとんど異文化ですよ。日常生活からはるかに遠い世界です。でも、異文化であるにもかかわらず、僕は、あえてそれを「内なる異文化である」という言い方をするのです。これは決してアフリカの文化ではない。自分の中に隠された記憶、ある種の集合的無意識の領域なので

す。

僕自身は東京で生まれ、東京で育つて、民俗的な世界を知らずに大人になっています。ですから、正直に言つてしまうと、見るもの出会う人がみんな珍しくて、珍しくて、という感覚でこの世界に入ってきましたから、今、吉増さんの言われたことはすごくよく分る。もしかしたら語りの場に根ざしながら、もつと物質的な想像力そのものを、ゴロつと、つくり出すことが我々には出来るのかもしれない。今日は何か、そういう可能性を強く感じました。

酒井 さて、もつともつと時間がほしい、詩人の吉増さんと民俗学者の赤坂さんとの鼎談の続きを、もつと聞いていたという想いを、司会の私自身が断ち切

※23 サミュエル・ベケット (Samuel Beckett)

一九〇六―一九八九年／劇作家・小説家・詩人
アイルランド生まれ。不条理演劇を代表する作家の一人。また、二〇世紀フランスを代表する劇作家としても知られている。一九六九年ノーベル文学賞受賞。代表作『ゴドーを待ちながら』は不条理劇の代表作として演劇史にその名を残し、多くの劇作家たちに強い影響を与えた。

※24 ウィリアム・バトラー・イエイツ (William Butler Yeats)

一八六五―一九三九年／詩人・劇作家
アイルランド生まれ。神秘主義思想をテーマにした作品を描き、アイルランド文芸復興を促した。日本の能の影響を受けたことも知られる。一九二三年ノーベル文学賞受賞。代表作に『アシーンの放浪』などがある。

※25 『アイヌの碑』（あいのぬいしぶみ）
著者 萱野茂
アイヌ文化の精華を伝え、民族の魂を守る男の自伝（朝日新聞社、一九九〇年）。

※26 砂澤ビツキ（すざわびつき）
一九三一―一九八九年／彫刻家
北海道旭川市生まれ。土産物の木彫から出発し、大胆にして繊細、原始的にしてモダンな独自の作風を確立した。北海道の先住民であるアイヌの血を引き、その作品にもアイヌ文化の伝統が息づいているが、砂澤自身は「アイヌの芸術家」という枠にはめられることを嫌ったといわれる。初期には阿寒湖畔と鎌倉、その後札幌を制作の拠点としたが、一九七八年には旭川と同じ上川支庁の北部、音威子府村成島（おさしま）の小学校跡にアトリエを構え、亡くなるまでの十余年、精力的に木彫作品の制作

を行なった。

※27 つげ義春（つげよしはる）
一九三七年／漫画家・随筆家
東京都葛飾区生まれ。五歳の時に父親に死なれ、母と兄弟達（弟の忠男も漫画家と転居しながら極貧生活を送る。漫画家を志す）からは水木しげるのアシスタントなどをつつ、「ガロ」（青林堂、一九六四―二〇〇二年）にて『沼』、『チーニ』などを発表。それまでの漫画表現にとられない新しい世界を作る。その後、精神衰弱もひどくなり徐々に漫画を描くベースが落ち、八〇年代半ばを最後に休筆中。主な作品として、漫画『ねじ式』、『無能の人』、『リアリズムの道』など多数。随筆『貧困旅行記』（新潮社新编版、一九九五年）など。

※28 『無能の人』（むのうのひと）著者 つげ義春
多摩川の河原で石を売る男とその家族を中心に、現代社会から落ちこぼれた人々をユーモラスかつ暖かく描く。主人公の助川はつげ自身がモデルという指摘もある。一九九一年、竹中直人監督・主演で映画化された。